

愛が重めの獣人王が
身分違いの俺を離してくれない

ワビ

スピラの城の侍女長。
コバとライの世話をする。

アトレ

幼い頃よりケイネスと共に
育てられた側近。
人間のコバのことをよく
思っていない。

スーリヤ

人気No.1を誇る男娼。
コバと兄弟のように育った。

サハン

近衛騎士団の第三隊長を
務める虎の獣人。
人間の国ルムダンでコバを
捜す。

ケイネス

大国スピラの王を務める獅子の獣
人。命を狙われ、怪我をしたところ
をコバに助けられたが、彼を置
いて国に帰らざるを得なかった。

コバ

スラム街で育ち、現在は薬草を
売って生活している山暮らしの
青年。傷だらけのケイネスを拾い、
一夜を共にしてライを授かる。

ライ

コバとケイネスの子供。
まだ人型にはなれない。

Characters

目次

愛が重めの獣人王が
身分違いの俺を離してくれない

7

番外編 甘え下手なツガイ

303

愛が重めの獣人王が
身分違いの俺を離してくれない

丸くてふわふわの耳。ひよろりと長い尻尾。

目の前で血にまみれて倒れている男には、人間にはない獣の耳と尻尾がついていた。

固唾を呑んで見つめていると、その獣耳がぴくりと震え、男はゆっくりと薄目を開けた。

人間のものとは思えない——黄金の瞳。

まっすぐ俺を捉えたその瞳は、なぜかうつとりと細められる。

「ツ……ガイ、だ」

「は？ ガイダって？ あつ、おい!？」

よく分からない言葉を残し、獣男はそのまま意識を失った。

◇ルムダン国◇

——さあさ、いいものがあるよ。寄っていきなよ。

旅人や商人が行き交う街には、物売りがずらりと並び、客寄せの声があちこちで響いている。俺はその一角に布を敷き、薬草が入った籠を並べていた。

前の通りはそこそこ人通りが多く、肩をぶつけ合いながら歩く者たちで賑わっている。その雑踏の中で、ひとつの影がふいに俺の前で立ち止まった。

「赤葉^{あかば}売りの赤毛のコバ」

その声に顔を上げると、見知らぬ中年の男が立っていた。

「……こんにちは。いらっしやい」

俺は軽く頭を下げて笑顔を作る。男が呼んだ通り、コバは俺の名だ。

初対面の男に名を知られているのは、俺が売っている「赤葉」がとても珍しい代物だからだ。

赤葉は海辺にそびえる断崖絶壁の山にしか自生しておらず、採取するには自ら登るほかない。そのため希少価値が高く、高値で取引されている。本物をこんな路地裏で売っているのは俺くらいなものだ。

そして、いつの間にか、俺は巷で「赤葉売りの赤毛のコバ」と呼ばれるようになっていた。赤葉と赤毛、これを目印にされているのだろう。

「いやあ、俺は運がいい」

中年男は無造作に伸ばした顎髭を撫でながら、しゃがみ込んだ。俺もボロを身に纏っているが、男の服もそう変わらない。

「赤毛のコバ、お前はスラム街出身だろう？」

「……」

「今はどこかに籠もって滅多に人前に姿を出さないそうじゃないか。たんまり稼いでいるって噂だ」

「そう見えるかい？」

俺は肩を竦めた。

稼ぎがあるなら、ボロなど纏うはずがない。

「冷やかしはごめんだよ。赤葉を買ってくれるのかい？」

そう言った瞬間、男の手が籠の赤葉に触れる。そしてそれをおもむろに掴み、自らの懷に滑り込ませた。

「えっ!? —— おい、何しているんだ！ お代が先だよ！」

「ほらよ」

男は汚い齒をニツと見せて立ち上がり、懷から金を取り出した。だが、俺が手を差し出した瞬間、地面に落とす。ちゃりん、と音がしたあと、硬貨は転がっていった。

「ちよつと、お金が！」

「ああ、これだけの金額、お前なんぞに渡してやるんだからありがたがれよ」

転がる金を拾っている間に、男は俺に背を向け、大股で去っていく。やられた。

「……全然足りないって」

男が落としていった金は、小さいパンひとつの値段にすぎなかった。これでは、馬車代にもなら

ない。この街に来るだけで大赤字だ。

「あーあ」

「しょうがないさ」

隣で物売りをしていたおばさんが、そう呟いた。

「だよな」

転がった小銭を拾い上げながら同意する。このルムダンという国では、こういったことは日常茶飯事。スラム街で生まれ育った俺は、こんな扱いにはとくに慣れてしまった。

ルムダンは海に囲まれた離島で、他国との交流はほとんどない。

変化を嫌う国では、生まれついた場所が人間の価値を決める。だから、文句を言ってもしょうがない。誰も助けてくれないから、どんな不満も「あーあ」と一言で手放すのだ。

大抵の者は、ここで不満を持ちながら暮らす。

だが俺には、崖を登れる手足と、人より機敏に動かせる身体があった。だから、スラム街を出て、ひとりで山暮らしを始めた。

山には獐猛な野獣がごまんといるし、危険は付き物だが、ゴミ溜めで暮らすよりはよっぽど自分らしくいられる。

「おや？ これは……もしかして」

次に俺の前に足を止めた客は、旅人のような身なりをした男だった。

赤葉をまじまじと見つめている。さっきの中年男に半分ほど持っていかれたが、まだ売れるだけ

の量は残っていた。

「いらつしやい。これは赤葉という薬草だよ。煎^{せん}じて飲んでもいいし、すり潰した汁を傷口に擦り込んでも使えるんだ」

「やはり赤葉か。珍しいので驚いた」

「お。知っているのかい？ これは真正銘本物の赤葉さ。断崖絶壁を登り切れる奴は、とんといない。お客さんは運がいい」

「これは君が？」

「ああ。ぜひ一度、試しに買っていつておくれよ」

俺は気を取り直して、残りの赤葉を手にも商売を続けた。

「——やった！ 布と古着が買えた」

さっきの旅人は、俺の言い値で買ってくれた。値下げ交渉前提でいつも高めに吹っ掛けているが、それでも安いと言ってくれる珍客だった。おかげで、目的の布と古着を手に入れることができた。

「満足、満足」

鼻歌交じりで、それらをひとつにまとめて背負い、街のはずれに向かう。

路上はゴミだらけだし、汚水が流れっぱなしだから変な臭いが充満している。ひさしぶりの街は鼻が曲がりそうだ。さっさと出て行きたくて、足を早める。

「あつ、農家のおっちゃん！」

顔なじみの農家が街から出る時間帯を見計らって、俺は厩舎^{きゆうしゃ}の柱の陰からひっそり顔を出した。

「コバか。待ち伏せかい？ なんだ、また馬車に乗せてほしいのか？」

「うん。お代は払うからさ！ 頼むよ！」

手を合わせて強請^{ねだ}ると、おっちゃんは仕方ないと諦め顔をして、顎をしゃくった。それを合図に、俺は馬車の荷台にささっと乗り込む。

「ありがとう！」

「はいよお」

おっちゃんの気のない返事を聞きながら、ゆっくり流れていく景色を眺める。

轆^{わだち}だらけの田舎道。代わり映えない田園風景。それらを見ると、眠気に襲われる——がたんと大きく馬車が揺れ、気づけば山のふもとまで来ていた。

「ここでもいいかい？」

「ああ……、うん！ ここで充分だよ。また赤葉を差し入れに行くね。収穫時期になったら田んぼの手伝いにも行くから。他にも手伝うことが……」

「はいはい。気を付けて」

俺は馬車から降り、去っていく馬車に向かって「またねえ！」と思いつき手を振った。

「よし！ 帰ろう」

くるりと踵^{かか}を返し、いつもの獣道に足を踏み入れた。

目当てのものが買えたおかげで、山を登る足取りも軽い。

腰の辺りまでぼうぼうに茂った草を木の棒で寄せながら、傾斜を登っていく。

「——お」

視線の先には赤い果実がたわわに実った木があった。ひよいとひとつ摘み取って歩きながら頼張る。目が醒めるような酸っぱさだ。疲れが取れる。

進んだ先にも多くの果実があった。それらを夢中で摘み取っていると——ふいに、ぐにと何かを踏みつけてしまった。

「……っ」

足元を見ると、茂った草木の隙間から、獣の長い尻尾が覗いていた。

ぞつと背筋に悪寒が走り、静かに足を持ち上げる。

絶体絶命。飛びつかれて、喉をガリツと噛み切られる——そんな想像が脳裏をよぎったが、草むらからは何も現れない。

「む？」

動かない。それに気配も何も感じない。死んでいるのか。

……それにしても、見たことがない尻尾だ。どんな獣だろう。

尻尾の正体を知りたくなった俺は、腰に下げたナイフをそつと手に持って、恐る恐る草を掻き分けた。

「え——人!？」

てつきり獣が現れると思ったのに、そこには長髪の成人男性が倒れていた。全身泥と血まみれ。

俺は即座にしゃがみ込み、男の息を確認する。胸元が上下して——生きている。

「あんた、大丈夫か!？」

山の傾斜で足を滑らせて落ちたのだろうか。茂みで倒れているのは、獣から身を隠すためだろうか。

「今、手当てを……って、なんだ？」

男の頭に、丸くてふわふわの耳がある。

それから、今しがた踏んづけたひよりりと長い尻尾は、男の尻から生えていた。

念のため、飾りではないかと触れてみると、温かい。……本物？

「ひっ!」

俺は驚きのあまり、尻もちをついた。

「なんだこいつ、耳と尻尾が生えている!? 化け物だ!」

叫びながら、化け物? と疑問が浮かぶ。

これは、化け物というよりも、獣人だ。

その瞬間、子供の頃の記憶がふつと蘇る。大人に読んでもらった本に獣人のことが書いてあった。海を渡った先の大陸には、獣の特徴や特性を持つ人間がいる——そんな話だった。

当時の俺はその存在を信じていた。けれど、閉鎖的なルムダンでは確かめる術もなく、いつしかただのおとぎ話にすぎないと思うようになっていた。

「……う」

大声を出したせいか、獣人は呻き声を上げる。俺はびゅんつと反射的に飛び跳ねた。
「く、食うなよ!」

獣人に向かって叫んだが、瀕死の状態では俺を襲うこともできないだろう。
ただ、助けたあと——喰われるかも。

物語に登場していた獣人は獐猛で、人間に喰らいついていた。

だからこそ、人間はこの島国に移り渡り、人間だけの国——ルムダンを築いた。そう……あの絵本は、ルムダン国が生まれるまでの物語だった。

「……う」

獣人がまた呻いた。

どこか痛むのだろう。倒れている奴を放置するほど、性根は腐っていない——が、命は惜しい。
俺は立ち上がり、獣人に背を向けた。だが、数歩歩いたところで、引き返す。

「いや、無理だな。おい、しつかりしろ!」

一瞬迷ったが、見捨てるなど、後味の悪いことをできるわけがない。

獣人は俺の呼びかけに反応するかのように^{まぶた}瞼をぴくりと動かした。もう一度、「しつかり」と声をかけると、薄目を開く。

覗いたのは、あまりに美しい黄金の瞳だった。

どくん、と心臓が強く打つ。

なぜか、俺はその瞳から目を逸らすことができなかった。ただ茫然と見つめていると、ざっと鳥

肌が立った。恐怖とは違う、全身の血が逆流するような熱が駆け巡る。

なんだ……こいつ。

「ツ……、ガ、イダ」

「は? ガイダって? あっ、おい!」

聞き直したが、獣人はそのまま再び瞼を閉じた。

「おい……おいつて?」

頬を叩いてみるも、反応はない。

「——触れるぞ!」

獣人の状態を確かめるために、服を緩める。

全身に小傷がある。おそらく高い場所から落ちたのだろう。ただ、肩にある切り傷は小さいが深い。転んで、何かが刺さってもこうはならない。鋭利な刃物によるものだ。

「……矢傷?」

外から見える傷の中ではこれが一番酷い。処置をするため、解いた獣人の腰帯でそこを止血した。

「おい! 目を開ける。こんなところで倒れていたら、獣に喰われるのがオチだ。死ぬぞ! 起きて自分の足で歩け!」

強めに頬を何度も叩いたが、意識は戻らない。俺は泥と血にまみれた身体をもう一度見た。足の腫れ方を見るに、もしかしたら折れているかもしれない。目覚めたところで動けないかも。

「……この先に、洞窟がある。あんたをそこまで連れていく」

腹に力を込め、俺は獣人の頭の方に移動する。

「できるだけ痛くないように運ぶからよ。我慢しろよお」

俺は獣人の上体をやや起こして背負い、胸に腕を回す。そのまま立ち上がり、中腰のまま大きな身体を引きずった。

ふらつく足に力を込め、前傾姿勢で少しずつ移動していく。

「う……」

重い。かなりきつい。

全身から滝のような汗が噴き出す。何度も背負い直しながら、それでも日暮れ前にはなんとか洞窟へ辿り着いた。

洞窟の中は岩肌が剥き出しで、足元はぼこぼこしている。

俺はそこで一番平たい場所を選び、獣人をそっと寝かせた。

「まず、汚れた服を脱がすぞ」

獣人の意識は戻らないが、声をかけて服を脱がしていく。

運よく洞窟内には湧き水があったから、そこで布を濡らし、獣人の身体についた泥と血を軽く拭き取った。それから買ったばかりの真新しい布を引き裂いて包帯にし、その身体に巻き付けていく。

靴を脱がすと、足首は酷く腫れ上がっていた。折れていてはまずいので添え木をして固定する。ポトン。

汗だけで世話をしていたから、獣人の頬に汗が落ちた。汗を拭うにしたって、両腕が塞がってい

てはできやしない。自分の顎から汗が流れ落ちてしまう。

「ちょうど古着を買ったばかりでよかった……ん？」

古着を獣人に着せようとしたとき、意識のない獣人の唇が動いた。舌が出てきて、頬に伝った俺の汗を彼は舐め取った。

「あんた……何を恥ずかしいことを」

汗を舐めるなんて。

だが、獣人は何かを求めるように口を開けたので、喉が渴いているのだと気がついた。

「——待ってろ。今、水を持ってきてやるからな」

持参していた竹筒に湧き水を入れて、獣人の元に運んだ。

水を飲みやすいように頭を支え、膝を貸してやる。そして口元に竹筒を近づけて、ゆっくり傾けたが、上手く口の中に入っていわずに端から流れてしまった。

「しょうがない」

俺は水を含んで、その口元に顔を寄せて、唇を重ねた。

むせないよう、こぼさないよう、慎重にゆっくり流し込む。獣人の喉がぐくんと飲み込むのを確認したあと、唇を離し、また同じように口移しで水を与える。

びく、とわずかにその身体が動いた瞬間——

「——んんん!？」

にゆるっと熱い舌が口の中に入ってきた。その舌が俺の舌をとらえて、絡みつく。

「んんはっ!」

驚いて、咄嗟に身を引いた。

後ろに座り込んで、口元を押さえる。

「な……何？ 今のは……?」

舌を口の中に入れられた。もっと水がほしいのか？

そう思って立ち上がるうしたら、手を掴まれた。

「っ、水を持ってくるだけだっけ」

意識はないから返事がない。だが、その手は離れない。仕方ない、と俺は彼の傍に横たわった。

すると、俺の腕を掴んでいた手が、もっと近くに寄れとばかりに肩に回される。腕枕をしているような形になると、彼の身体が弛緩した。

「ん？ 人肌が恋しいのか?」

……やっぱり、変な奴。

そう思ったけど、嫌な気分じゃなかった。大きな身体と引っついていっていると、不思議としつくり馴染むような気さえする。

——こいつ、綺麗だな。

よく見ると、獣人は整った顔立ちをしていた。泥にまみれて気づかなかったが、その長い髪は瞳と同じ黄金色をしている。

すぐに焚き火を組まなければ……だけど、もう少し……

俺は彼から漂う甘い香りをすんと嗅ぎながら、その横顔を静かに見つめていた。



日の出前の霧の濃い中、俺は断崖絶壁を登った。

一歩間違えば崖下に落ちて、海の藻屑^{もくず}となる。失敗して死ぬ奴は後を絶たない。

手足の先はまだ意識を向け、すべての感覚を研ぎ澄ます。どこの出っ張りに手足をかけるか。風向きは？ 身体の疲れは？ 何ひとつ油断できないギリギリの感覚でてっぺんまで登り切った。

崖の上は俺ひとりが寝転べるくらいの広さがあり、岩肌^{いば}に根を張った赤葉がびっしり生えている。俺は腰に括りつけたナイフを手にとって、赤葉を切り取り、背負っている籠に入れた。

根っこまで抜かないのは、赤葉は根を残せばまた生えてくる強い雑草だからだ。

「こんなところか。早く戻ってやらないと」

採取を終えて立ち上がると、びゅうっと潮風が頬を撫でた。湿気を含んだ風を感じながら、目の前にある真つ青な景色を見つめる。

海と空が溶け合うように重なって、どこまでも広がっていた。

昔から、高い場所は怖くない。むしろ、心地がいくらいだった。

胸に静かなものが広がり、背伸びをする。すうっと息を吸い込み、登るよりもずっと早く地面に降りた。

「……まだ、起きてないか」

洞窟に戻ると、獣人は朝出たときと同じ姿勢で横たわっていた。

近づくと、額には汗が滲み、苦しげな表情で眠っている。指先でその額に触れると、手のひらにじわりと熱が伝わってきた。

「……待ってろ」

俺は背負っていた荷を下ろした。

赤葉を採りに行ったあと、この洞窟から山をひとつ越えた先にある住処へ寄ってきたのだ。

荷を解くと、中には消毒用の酒と、赤葉をすりおろすための道具が入っている。俺は乳棒と乳鉢を取り出して、採ってきたばかりの赤葉をすり始めた。

「しみるからな。辛抱しろよ」

昨夜の処置はその場のしぎにすぎない。改めて手当てを施すため、慎重に包帯を外していった。

痛みが強くなったのか、獣人は耐えきれなくなったように声を上げ、荒々しく身をよじった。俺は必死にその身体を押さえ、宥めるように「あと少しだから」と言葉を重ねる。

「……終わったぞ」

やがて獣人はうっすらと瞼を開いた。焦点の定まらぬ視線が一瞬こちらを掠める。しかし返事はなく、瞼はすぐに閉じ、眠りへと落ちていった。

しばらくは俺も洞窟で暮らすつもりで、周辺に罫を仕掛け、食料を多めに調達していた。

獣人の状態からして、十日ほどはここを動けないだろうと踏んでいたのだ。

だが、洞窟暮らし四日目。

包帯を変えようとしたところ、獣人の異常な回復力を目のあたりにした。

傷口は化膿せず、もう塞がりかけていた。肩の矢傷は深くてまだ日数がかかりそうだが、小傷はすでにかさぶたになっているものまである。人間にはない回復力だった。

獣人は眠り続けていたが、それはまるで、本能が身体の回復にすべての力を注いでいるからのように思えた。

「——ん……、俺、寝て、た？」

かくんと自分の頭が落ちて、思わず呟く。

藁で履物を編んでいたはずなのに、手元は全然進んでいない。一度顔を洗ってこようと横を向くと、黄金色がきらりと光る。

「ん……」

ぼけっとそれを見つめていたが、瞬きしたあと、飛び上がった。

「ひiiiiiiiiっ！」

——獣人が目覚めているじゃないか！

ぎらぎらした瞳はまさに獲物を狙うような強さがある。

一瞬で肌が粟立ち、俺は反射的に彼から離れ、岩陰に身を潜めた。

動悸がばくばくとうるさい。だが、それ以外は聞こえない。咄嗟に逃げてしまったが、考えれば、獣人は手負いなのだ。

「お……おい、そのあんた！」

念のため、岩陰から声を出す。

「あんたは、山で倒れていた。俺はあんたの怪我の手当てをしてやったんだ！」
しん、と静まり返っている洞窟内に自分の怯えた声が響く。

「だから、俺のことを食うな！ 食ったら駄目だからな！」

「……」

——返事がない！

俺の言うことが分からないのか、それとも、やっぱり俺を食べたいのか？

「……」

掠れ声が――

恐る恐る顔半分を岩陰から出すと、獣人は何か喋ろうとしていた。だが、声が全く音になっていない。それでも懸命に何かを伝えようと口を動かし、咳き込んだ。

「おい、よせ！ 無茶するな！ よく夜中に唸ったり叫んだりしていたから、喉を傷めているんだ」

俺は思わず、勢いよく岩陰から飛び出した。その途端、獣人の表情が、ぱあああつと輝く。

「……む？」

明らかな喜びよう。

もしか、こいつ、俺が手当てしたから……懐いた？

敵意などは微塵（みじん）も感じないが、用心に越したことはない。まずは確認だ。

「いいか。俺はあんたを襲わない。敵じゃない」

こくりと獣人が頷いた。やっぱり獣人は共通語を理解できるようだ。

「だから、あんたも俺を食うな。いいな？」

獣人はまた頷く。なんだか、酷く嬉しそう。俺に話しかけられることが嬉しい……みたいな？

呆気にと取られていると、獣人はうつとしたりした表情で上体を起こし、こちらに手を伸ばした。だが動くときと激痛が走るのか、すぐにその場に蹲（すくま）る。

「っ！」

「お……おい、大丈夫か!？」

慌てて俺は彼の元へ駆け寄り、その身体をゆっくり寝かせる。

「自分の状態くらい見なくとも分かるだろう。特に足の骨は折れているから……も……」

思ったよりも顔が近かった。黄金色の瞳に自分が映っているのが分かる距離だ。
ドクンツと鼓動が跳ねたあと、急に胸が騒がしくなる。

「あんたの目……変だ。見ていると……こう、吸い込まれそうになる」

「……」

すると、獣人が口を開いた。だが、声にならない。
「ん？」

聞き取れるように獣人に顔を寄せたとき——ぺろりと耳を舐められた。
舐め……

「ぎゃあああああああ！」

獣人を突き飛ばし、即座に距離を取る。

こいつ、俺を味わった！ やっぱり獣人は人間を食うんだっ！ 懐くふりをして騙して、取って食うつもりだったんだ。

——逃げなくては！

荷物も全部置いて、その場から離れようと立ち上がった。駆け出そうと地面に足を踏み込んだ、その瞬間——

「……いつ！」

獣人は声にならない声で叫んだ。

振り返ると、獣人は地面に両腕をついて、こちらに向かって這いずり始めた。

「おい、やめろ！ せつかく手当してやってんのに！」

「……が、っ……ごぼっ、ごぼっ」

「よせ、やめろって!？」

制止の声も聞かずに、獣人は近寄ってくる。

少し迷ったが、心配が勝って、俺は引き返した。口元から覗く牙を見て、改めて恐怖にかられたが、そのまま彼に手を貸す。寝床に寝かせて、ふうっと額の汗を拭った。

獣人はそんな俺をじつと見つめていたが——襲ってくる気配はない。

「もう一度聞く。俺のこと、食べようとしたんじゃないのか？」

獣人は、こくりと首を縦に振る。

「……い」

「ん？ 何？」

さっきから獣人は同じことを言っている気がする。

口の動きから見て、三文字。

最後の一字は、「い」だ。

なんだろう。ほしいとか？ いやいや、それだと食べる気満々じゃねえか。

「どんなに腹が減っても、俺みたいな親切な奴を食べたらバチが当たるぞ！」

もう一度警告した。さっき耳を舐められたとき、悪寒に襲われたのだ。

「絶対ダメだぞ」

念を押すと、獣人はしっかり頷く。それから、また何かを言おうとして咳込む。必死な様子を放っておけなくて、俺は獣人の頭側に回り、膝を貸した。

「ほら、水。飲めよ」

水が入った竹筒を彼の口元に当てて、飲ませてやる。

意識がないときと違って、飲ませるのは楽だ。手が使えるようなので竹筒ごと渡すと、彼は力が入らないみたいで落としてしまった。

それを拾って、再び飲ませてやると、彼は申し訳なさそうな視線を俺に向けた。

「気になるな。食べられるなら何か腹に入れておけよ」

獣人がいつ目を覚ましてもいいように、傍らには果物を置いていた。

「食べさせてやるよ」

まだ動くのは辛いだろうと、みかんの皮を剥いて、獣人の口に運んでやる。

素直に開いた口には、人よりも少し尖った牙がある。それに、ぞぞつとしながらも、ひとつ、ふたつとその口に放り込む。

「食欲はありそうだな……夜は肉にしてやる。食えるか？」

腹を満たしておけば、俺のことを食べる気にはならないはず……

「おい……、聞いている？」

さつきから獣人はうつとりと俺を凝視している。

目元が赤く熱っぽい……ああ、本当に熱があるのかもしれない。呼吸もさつきより荒くなっている。

「大丈夫か？ まだ熱が上がってきたっぽいな」

「……」

みかんの最後の一房をその口に放り込んだあと、俺は彼の額に自分の額をくつつけた。

熱を測る。それだけだったのに——獣人が顎を上げたので、ちゃんと唇が当たった。そして、ペろりと肉厚の舌で唇をなぞられた。その柔らかさにぎくりと硬直する。

こいつ、また!?

俺は獣人を突っぱねようと地面に手を置いた。すぐに身体を離し、「俺を味見するな！」と怒鳴りつけるつもりだった。

「……っ」

なのにできない。

いい香りだ。なんだこれ……

獣人から漂う香りに、くらりと一瞬、意識が飛ぶ。

その隙に、口の中に湿った柔らかいものが入ってきた。とても熱くて少しざらついていて、それが舌だと分かるのに数秒かった。ざり、とその舌に下顎を舐められたとき、ぞくぞくと身体に快感が走る。

「——くっ！」

全身に力を入れて地面を押して、獣人から顔を離した。勢い余って尻もちをつく。はあっ、と息を吐き、口元を手で拭う。

「な、何を、するんだ……俺のことは食うな、って」

怒鳴るつもりだった声は、弱々しく途切れた。睨みつける視線も、彼を見つめてしまうだけになる。それに、尻もちをついたまま、動けない。

唇が触れた瞬間から、獣人の香りが増している。

——嗅ぎたい。

この男の首筋に顔を埋めて、その香りを思う存分嗅ぎまくりたい。

この感覚に疑問を持つ前に、俺は彼に身体を寄せた。

「ここから、いい匂いが……する」

魅力的な香りにはあらがえない。気づけば俺は、彼の首元へ顔を押し付けていた。深く吸い込んだ香りは頭の奥へと広がり、じわりと沁み込んでいく。まるで強い酒にあてられたときのような、眩暈がする。

「ふう……ん」

甘えた声が、自分の喉奥から漏れた。

どれくらい彼の首筋に顔を埋めていただろう。すぐ近くでごくりと大きい喉の音が聞こえて、ようやくそこから顔を離れた。

「……ご、めん」

自分の声が上がっている。また香りに誘惑されそうで、首を横に振る。

「俺……どうか、している……顔を水で洗ってくるよ」

魅惑的な首筋から視線を逸らすと、横たわっている獣人の異変に目が止まった。

その下半身は、下衣の上からでも分かるほど大きく主張していた。大抵は熱が出れば萎えるはずなのに、酷く興奮している。

「……発散、してやろうか？」

気づけば、そんな言葉を口にしていて、自分でも驚いた。

何を言っているんだろう。二十七年生きてきた中で、今日の俺は一番おかしい。男のそんなものに触れたいなどと一度も思ったことはない。なのに自分から触れようと声をかけるなんて……。この獣人に対する自分の反応すべてが、変。

獣人も驚いたように目を見開き、落ち着かない様子で視線を彷徨わせている。

けれど、俺と視線が合うと、その瞳に熱が帯びた。欲望を隠し切れず、期待で瞳の奥が震えている。

確かな興奮を見つめながら、俺は恐る恐る獣人の下半身に手を伸ばした。

その下衣をずり下げ、腹部に付きそうなほど反り勃った性器を直接手に包む。人間と同じような形と色をしているが、サイズが大きい。

立派なそれを上下に扱いてみる。片手だとすぐに疲れてしまつて両手に変えると、太い先端から透明な液体が溢れてきた。先走りも量も多い。それを陰茎にも塗り込み、ぐじゅぐじゅと音を立てながら強めに擦ると、ほどなくして勢いよく射精した。

「すごい、量……」

腹の筋肉の溝に溜まった白濁をぼんやりと見たあと、視線を顔に移すと、突き刺さるような鋭い視線とぶつかった。そのあまりの鋭さに動揺し、握っていたそれから手を離れた。射精したにもかかわらず、硬いままの性器が腹を打つ。

「あんた……」

射精したのに、全然萎えていない。獣人は性欲が強いのだろうか。

どうしよう……いや、どうしようだって？ そう思っている時点で、嫌じゃないのかもしれない。

「もう一度……ん？ あんた、何してんの？」

獣人が俺のお尻を撫でている。獣人は無自覚だったのか、ハッとしたように尻から手を離れた。眉をひそめ、自身の手を見つめている。

ああ……そういうことか。こいつの視線が妙に熱っぽいのは、俺に欲情しているからだ。

スラム街には男色家も多く、俺のような凹凸のない身体つきもそれなりに需要があった。俺は過去、貧困に困り、二回だけ身体を売ったことがあった。気色悪くてこの先一生、セックスなんかしないでいいと思っていただけ……

「あんた……俺とセックスしたいの？」

ごくり、と獣人は喉を鳴らす音で返事をした。

「ふうん、そうか。なら俺に入れる？ 何年も前だけど、一応経験はあるから」

提案しながら、俺は腰紐を緩めた。前開きの衣は、肌が簡単に露出してしまう。

喜ぶかと思ったが、獣人の眉間にはシワが刻まれる。

急に不機嫌そうな顔になった。男色ではないのか？ ただ……その視線は俺のはだけた胸元に向いている。

「……はあ、……はあ」

獣人の息は一層荒くなって、大きい性器がぐんと力強く跳ねた。

「はは、なんだよ、ヤル気じゃん。まあ、したいなら、いいよ。ちゃっちゃとやろうぜ」

「……」

提案するのは、俺もそういう気分だからだろう。性欲底辺な俺にしては珍しい。

「拡げるからちよっと待ってて。時間がかかるし、見られたくないから目を瞑れ。……ああ、これ、ちよんどういな」

獣人の出した白濁を指ですくい、自分の尻の窄まりに塗りに塗りにたくった。フニフニと縁を触ったあと、ゆっくり指を挿れていく。自分の指とはいえ、そこを弄るのは違和感が激しい。それでもなんとか、二本目も挿入して、徐々に拡げていく。

「……くっ」

苦しくて呻き声が漏れた。

何気なく彼の方を見ると、目を瞑れと声をかけたのに、じつと俺を見ている。

眉間にシワを刻んだままだから怒っているようにも見えるが、性器は血管が浮き出て、痛そうなほど張り詰めている。

「時間かかって悪いけど……、まだあんたのを入れられるほど、拡がってない」

あんまり見るな、と言葉を続けようとしたとき、彼の手が俺の方に伸び、尻の窄まりに触れてくる。

「あんた、動く……！」

「はあー、はあー」

獣人の食いしばった口元から涎が垂れている。眉間のシワは我慢の現れだったのか。

「んっ」

ゆっくりと獣人の指が中に入ってきた。

自分の指とは全然違う。長く骨ばったその指の感覚に、胸の内が落ち着かなくなる。

……あれ、なんだ……身体の内側が熱い？

不思議な感覚だった。自分の身体の反応が怖くなって、思わず獣人の首筋に顔を埋めた。その瞬間、ふわぁっと漂う匂いが鼻孔を刺激した。

こいつの匂い、やつぱり……いい。

好みの香りに包まれて身体力が自然と抜けていく。すると、獣人の指が尻を解すように動き始めた。とても丁寧な動きだ。痛むようなことはなく、拡げるのを彼に任せることにした。

「——んっ、……は？」

前後に動く指がある個所を擦ったとき、身体がびりつと痺れた。

「あ……なに、今の？」

尋ねると、指がまたそこを搔いたので、尻が指をきゅつと締め付けてしまう。

セックスは、受け身は痛くて苦しいだけ。経験上、それしか知らない。気持ちよくなったことなんてなかった。数週間に一度するかどうかの自慰も、機械的に精を吐き出すためのもの。

だが、さつきキスをしたときも思っただけで、こいつに触れると、知らない感覚が沸き上

がってくる。

「んっ、ひゃっ」

さつきと同じ場所を、また指で!?

尻なんて快感を拾う場所じゃないと思ひ込んでいたから、目を白黒させてしまう。

「そこ!? んっん!? へ、何——あっ」

混乱しながら、俺は獣人の頬に頭を擦りつけた。近くで熱い吐息が肌を掠める。

……唇。

まだだ。香りに誘惑されたように、形のいいそこから目が離せない。ほしい。味わいたい——

我慢ができず、ちゅうつとその唇を吸う。口寂しい赤ん坊が指しゃぶりを求めるようだ。それに、

この唇の感触も柔らかくて夢中になる。

何度も吸っているうちに、彼の方からも舌を絡ませてきたので、その舌も吸った。

「……ん、……ああ、う……うう……んっ、んっはっあっ、もう……いい」

いつの間にか、自分の性器はぼた、ぼた……と先走りを零している。前を触ってもいないのに、果てそうだ。

「指を抜け……んくっ」

丁寧な解されたせいか、中が驚くほど敏感になっていて、抜かれる感覚にぞくぞくが止まらない。……身体が、おかしい。

知らない感覚ばかりで、やめなくなる。けど、自分から言い出した言葉を引っ込められず、俺は

獣人の上に跨^{またが}った。

「傷……、痛まないか？」

獣人は欲情しきった表情で頷く。

この状況で今さらか。

俺は後ろ手でよく反り返った性器を支え、ゆっくりと腰を下ろした。

「……う」

入らない。

なんで、これが自分の中に収まると思ったんだろう。先端を含んだだけなのに、きつい。もうこれ以上動ける気がしない。

無理に腰を進めたら、尻が切れてしまいそうで怖い。

息を吐いて力を抜こうとするが、上手くない。

「はあー、はあーっ」

獣人は汗だくで荒い息を吐いている。繋がっている箇所からも、ドクドクと脈打っているのが伝わってくる。動きたいのに、俺を氣遣^{きぢ}ってじっとしているのだろう。

「ごめん……馴染むまで待つて」

獣人は切なそうに目を細める。どこを見て……唇？

ああ、唇を合わせたいのか。俺もさっき……気持ちよかった。

傷口に気を付けながら、顔を寄せて口づけた。あっという間に深くなる口づけが心地よくて、何

も考えられなくなる。身体の奥から快楽が沸き上がってくるような感覚がして、繋がった箇所が疼^{うず}く。

気づけば、俺はゆるゆると浅く腰を揺らしていた。

あ……さっきより拡がる。

「ん……あ……」

そのままゆっくり腰を下ろし、ついに一番太い部分を自分の中に収めた。それは熱くて大きく、自分の腹のどの辺りまで入っているのか、しっかり分かる。

「はっはあ……んっあっ」

いつも挿入には痛みが伴っていたのに、受け入れているところから、快感を拾い始めていた。

熱い。この大きいもので擦れば、もっと気持ちいいのが来る。そんな感覚に肌が逆立ち、なかなか動かせない。

「うう……」

これでは獣人の方は気持ちよくないだろう。そうと分かっても、未知の快感を得ることに臆^{おそ}してしまう。

そんな俺にとうとう焦^じれたのか、真下にある腰が揺れ始めた。

「んっ、はっ……あ!？」

頭まで突き抜けるような快感が走る。目の奥がちかちかし、自分がどうなっているのか分からない。

いつの間にか、自分の性器から白濁が漏れていた。果てた？　いつ……これ、何が？
尻の中がまるで意思を持っているかのように自ら蠕動^{ぜんどう}している。さらにおかしなことに、愛液でも出ているのかと思うほど、穴の奥が濡れていく感覚がするのだ。

男の身体は、愛液なんて出さなはずなのに。

「つ……何が？　ま、待って！　とま……ごめ……こわ、い。身体が変、だ……っ」

首を横に振ると、動いていた腰が止まった。けど、身体の内奥の疼きは全然止まらない。もう抜いてしまいたい。

やめようと言おうとして、獣人の顔を覗き込んで、息を詰めた。

「……あんた」

彼の表情は快感に歪んでいた。瞳に涙が溜まり、肌は紅潮している。胸が上下するほど荒い息を吐いているが、俺が「待って」と言ったからか、全然動こうとしない。

その様子に胸が異様に熱くなって、腰をやや下ろしてみた。

「——んっ」

そのとき、身体の内奥に熱いしぶきを感じた。中出しされた途端、腹の中が熱くなって、信じられないくらい——気持ちいい。

「あ、あ……お、れ……」

獣人の陰茎を咥えているそこがひくひくと蠢^{うごめ}いている。全身が強く痺れて、身体が上手く動かせない。さっき出したばかりなのに、俺の性器からも白濁が漏れている。こんなに何度も出るなんて

自分で自分が分からない。

息を整えているのに、身体の内熱が全然下がらない。だけど、いつまでも上に乗ったままでは重だろう。

「わ……るい……重い、よな」

震える足に力を込めて、腰を上げた。長大な性器が抜け切る寸前——獣人に腰を強く掴まれ、そのままに尻される。

「ひゃああっ、あ!？」

敏感になっているところを容赦なく押し込まれて、叫んだ声が裏返った。さっきよりずっと深い場所まで入っている。

痙攣する身体は思うように力が入らず、また獣人の胸元に身を預けてしまう。密着した肌から汗と混じったいい匂いがする。ああ、まずい……何も考えられない。

ぼんやりしていると、額に柔らかい唇が落ちてきて、顔を上げると唇を啄^{つば}まれる。不思議だ。口づけをしているだけなのに、身体が震えて仕方ない。

黄金の瞳を見ていると、身体の内奥から溶け出しそうな感覚を覚えた。



冷たい川に手を突っ込み、じゃぶじゃぶと洗濯物を揉み込む。

洗っているのは、獣人の服と包帯だ。

「はあ~~~~」

朝から数えて十回目のため息が出た。

全身がだる重く、下半身からは違和感が消えない。まだあの獣人に触られた感触が残っている。冷静になればなるほど、昨日の俺はおかしかった。

……だって、信じられないだろ。

興奮した獣人を鎮めるためではなく、俺が欲求不満で彼の上に乗ったみたいになっていた。あんなに喘いで、乱れて……

ただ、彼も怪我の痛みより気持ちよさが勝っていたようだったので、それは幸いだった。

何度精を出しても、全く萎える気配がなかった。獣人の性欲はすごい。

「うう、あいつに出会ってから、胸も身体もざわつく」

獣人のことを考えると、ドキドキする。

それを誤魔化すように、俺はパンツと服のシワを伸ばした。

「高そうな布……」

太ももまである長い上着は、深緑色の生地に金糸で刺繍が施されている。光の加減で模様が浮かび上がるその織りは、素人目にもただの装飾ではないと分かる。汚れが完全に落ちなくても、不思議と品格を損なっていない。

初めはただの遭難者だと思った。だが、獣人が身につけているものはすべて一級品で、明らかに

高貴な家の者が持つ代物だった。

そして彼の肩の傷。あれは、矢傷だ。

陰謀に巻き込まれたのか、海賊に襲われたのか、原因は定かではない。だがいずれにせよ、彼は何から逃れ、このルムダンへと辿り着いたのだ。

「あいつ、……これから、どうするんだろう？」

疑問を口にしながら、俺は洗濯物を籠に入れて立ち上がった。

洞窟を出る前、獣人は眠っていた。戻ったら目覚めているかもしれない。

「なんて声をかけたらいいんだろう」

昨日はスツキリしたか？ 気持ちよかったか？

「いや、そんなことを言いたいわけじゃない。はあ……ん？」

ふっと風が吹いた瞬間、甘い香りが鼻をくすぐった。横にある木に生っているのは、桃だ。

……きっと、あいつも腹を空かせているだろう。

俺は籠を地面に置いて、桃をひとつ手に取った。

「……あ」

視線の先に二頭のシカがいた。川に流れる水を飲んだあと、顔を寄り合わせてじゃれている。その様子が、どこか昨日の自分たちと重なった。

もし……獣人に行くあてがなかったら……俺が面倒を見てやってもいい。

山奥にひとりで倒れているくらいだ。行くあてがなくて、きつと困っているだろう。

「一緒に暮らそうって言ったら、驚くかな? ……喜ぶ、よな? だって、あんなに俺を見て嬉しそうにするんだもん」

口にするのと、胸が熱くなってきた。
なんて、いい思いつきだ。

「しし……ししし」

一度笑い声が漏れると、止まらなくなる。

洞窟に着いたら、早速提案してみよう。あつ、その前に自己紹介だ。まだ名前すら伝えていなかったつけ。何もかも順番を間違えた。なら、何から言おうかな——ウキウキしながら、俺は洞窟へと足を進めた。

「……ん?」

変な臭いが鼻をつき、空を見上げた。青い空には白い煙が立ち上っている。洞窟の方向だ。

狼煙、合図……?

——もしかして、洞窟で寝ているあいつが見つかった!?

この国で、移民の存在は許されない。厳しい処罰が待っている。それが人ではなく獣人の場合はどうなるのか。場合によっては、彼の命が危ない。

急ぎながらも、足音を立てぬよう慎重に洞窟へ向かう。

予想していた通り、狼煙は洞窟の前で上がっていた。

「……っ、待ってる。助けてやるからな」

腰にはナイフが二本。これで攪乱かくらんして隙を作り、獣人を逃がしてやるんだ。

木陰に隠れながらタイミングを見計らっていると、洞窟の中から誰かが出てきた。

フードを被った奴がふたり……

誰も見ていないと油断したのか、ひとりがロープのフードを外した。それを目にした瞬間、恐怖で肌が粟立つ。

驚いたことに、虎だった。二本足で歩く虎。

「……っ!」

——あれも獣人!? 助けたあいつとは全然違う。今見ている奴は、完全に動物の顔をしている。

同じ獣人でも、別物だ。

なら、あの虎は人間を食べるものじゃない。デカイ口は人の頭を丸飲みできるだろう。牙だってあんなに鋭い。

「……が、無事でよかった」

虎が、喋った。

「ああ、我が国に連れて帰ろう」

ふたりとも、この世界の共通語を使っている。

彼らが「無事でよかった」「連れて帰ろう」と話しているのは、あの獣人のことだろうか。

あいつには連れがいた。……獣人の国に帰る?

思わず後退あとずさりすると、足元で落ち葉が乾いた音を立てた。

「……誰だっ！」

わずかな音に気づいた虎獣人がこちらを見て吠えた。その瞬間、条件反射のように俺は全速力で駆け出していた。洗濯物も、桃も、何もかも放り捨てて逃げる。

背後から虎獣人が追いかけて来る音が聞こえる。

捕まったら、食べられる——殺される。

恐怖が頭の中を支配して、ただ、走るしかなかった。

傾斜を滑り落ちるような勢いで下ると、背後から「深追いするな」というもうひとりの声が聞こえた。

「はあ、はあ……」

走って走って、山を下り切ったところで、ようやく後ろを振り向き、誰もいないことを確認する。その場にしゃがみ込んで息を整えた。臉を閉じると、目頭が熱くなるのを感じる。

——俺とは、初めから違ったんだ。

「あ」

あーあ。いつものように、その一言で諦めよう。

そう思ったが、あの獣人の姿が脳裏に浮かぶと、胸の奥がきゅつと締め付けられた。

「……だけど、礼ぐらい言われてもいいよな？　そうだよな」

看病して、お礼の一言ももらえないなんて、割に合わない。

冷静さを欠いて逃げ出してしまったが、彼の仲間なら俺のことを喰わないかもしれない。共通語を使うなら話し合ってたってできるはず。

そう思うと、じつとしていられなくて立ち上がり、逃げてきた山道を足早に戻る。

下りは早い、登りは倍以上の時間がかかる。それがもどかしい。

洞窟の前に着くと、狼煙はすでに消えていた。

嫌な予感がして急いで洞窟に入り、そして予想外の光景を目の当たりにして、足が震えた。

「……う、そ」

そこには誰もいなかった。もぬけの殻だった。

敷いていた干し草や血のあと、すべてが綺麗に片付けられている。まるで、初めから俺ひとりしかいなかったかのように。

さっきの狼煙は合図じゃない。あいつの痕跡を燃やして消していたんだ。

俺は慌てて洞窟を出た。足跡を必死に探してみたけど、どこにも見当たらない。

どうして。早すぎる。もう少し、ほんの少し、俺を待ってくれようとは思わなかったのか。

「はっ……はっ、はあ」

とんでもない後悔が襲ってきた。

——逃げるんじゃないかった。なんで俺はあいつから離れて逃げたんだ。

息が苦しい。胸も身体も全部が張り裂けてしまいそうになりながら、山を駆け登った。高い場所に出ると視界が開け、海が広がる。

そこに一隻の船があった。見たこともない船だ。その船の上にロープ姿のふたりがいる。あれはさつき追いかけてきた……

口の端が震える。

「ま、って……待って！ 待ってくれよ！」

気づけば叫んでいた。なのに船は進んでいく。

行ってしまう。俺のことなど、気にせず——

「行っちゃいやだあ！」

目から大量の涙が一気に溢れ、膝から崩れ落ちた。どしゃぶりのように、とめどなく涙が流れ続ける。

こんな風に大泣きしたのは、初めてだった。

◇

いつものように海辺の崖を登り、赤葉を摘む。ふうっと息をついて腰を落とし、そこからただひたすら広がる海と空の景色を眺める。

海には漁船と貨物船が浮かんでいるだけで、変わった船は見かけない。

「この海を渡った先は、どんなところなんだろう」

四十日ほど前に助けた獣人は、仲間に連れられて海を渡ったつきり、戻ってこない。

俺はこの島国以外のことをあまりに知らないから、彼が今どこにいるのか、想像もできない。

冷たい海風が頬を打ち、身体が冷え込む前に崖を下りた。ここから住処までは、ひとつ山を越えなければならぬ。歩きながら、食用の野草や果物を摘み取っていく。

住処の周辺には、獣の侵入を知らせるために鈴をつけた紐を張っている。さらにあちこちに罌を仕掛けてあって、今日は兎が一匹かかっていた。

小屋に着いたら、早速火を起こし、捌いた肉をじつくりと炙った。食べられる頃合いになると、すっかり辺りは薄暗くなっていた。

はぐつと大きな口を開けて肉にかぶりつく。朝から果物しか口にしていなかったから、空腹のはずだった。なのに、一口食べただけでももう充分だった。

「……やっぱり食欲ない」

服の上から腹を擦る。一口でもう胸やけ気味だ。何か食べなくちゃいけないのに、食欲が湧かない。

おまけにここ最近、身体が熱っぽく、だるさが続いている。

「……風邪が長引いているのかな？」

今日も早めに寝てしまおうと、炙った肉を干し、小屋の中に入った。

干し草を敷き詰めた場所に寝転ぶ。そして——深緑色の上着を自分の身体にかけた。

獣人が忘れていった服だ。獣人の膝上丈の上着は、布団代わりに掛けるのにちょうど良かった。

——こんな上等な服を持って帰らないなんて、本当に馬鹿な奴だ。

スラム街では落とし物は拾った奴のモノ。

だから、これは俺のモノ。でも、取りに戻れば返してやったっていいのに……

そんなことを考えながら瞼を閉じると、意識はすぐに眠りへと引きずられていった。

ちりん。

侵入を知らせる鈴が鳴り、俺は静かに上体を起こした。

恐る恐る小屋の窓から覗いてみたが、何も見えない。集中し、辺りの物音を拾っていく。風が草木を揺らす。虫が鳴き、みみずくが低く声を落とす。

——そして、足音。この音は四本足の獣じゃない、二本足だ。

ゆっくりと落ち着いた足取りで、一步、また一步とこちらに近づいてくる。

遭難者か？ それともならず者？

俺は念のために腰にナイフと斧をぶら下げ、そっと小屋から外に出た。

姿は見えない。だが、ゆっくりこちらに近づいている。音がする方向へ視線を向けると、ロープを頭まですっぽり被った男がいたので、どくと心臓が跳ねた。

——あのときの、耳と尻尾の付いた獣人か!?

一瞬、胸が躍る。だが、男が近づいてくると、姿は見えなくても違うと分かった。

そして、ふっと侵入者はロープを外した。現れた獣顔に、息を吞む。

闇夜に溶け込むような黒い毛並み。虎と似ているが、全く異なる獣だ。

ただ、獣人はその恐ろしい見た目に反して、礼儀正しく頭を下げた。ルムダン人よりよほど、

ちゃんとしている。

「はじめまして。夜分遅くに驚かせて申し訳ございません」

「あ……あんたは？」

「豹です。豹の獣人。この国にはない生き物のはずです。貴方の足も相当速いですが、私の本気には及びません」

「豹？ それに、その声……」

俺は耳と記憶力はいい。だからこの声が、洞窟から逃げ出したとき、『深追いするな』と言った声の主で間違いないと思った。

もしかして、あいつが俺を探している？ だから、この男がやってきた？

「耳と尻尾が付いた奴は？ あんたはあいつの仲間だろう？ あいつは無事か？ その……、怪我をしていたから」

なんだか緊張して声が掠れる。

「お答えする前に、ひとつ質問があります。貴方は人間で間違いありませんね？」

「え？ ああ」

「本当に？」

「見ての通りだ。ルムダンには人間しかいないんだ」

俺が答えているのに、豹男は無視して独り言を呟く。

「やはり、あの御方は、熱に浮かされて勘違いをされたか……」

「なあ、今、あいつは——」

豹男は俺の言葉を制するように、すつと手を前に出した。その手は人間の形をしているが、肉球があり、鋭利な爪が生えている。

「はい。あの御方は無事です。ですが貴方には一切関係ありません。すべてお忘れください。『あいつ』などと呼んでいい御方ではないのです」

貴方には不釣り合いだと、豹男は言葉を続けた。

「はあ!? なんでそんなこと言われなくちゃいけないんだ。俺はあいつの——」

あいつの……何者でもなくて、言い淀む。

すると、豹男は懷から袋を取り出した。ちゃりんと硬貨の音がする。

「貴方があの御方を助けてくださったことについては、大変感謝しております。これはあの御方を手当てしてくださったお礼です」

「はあ!? そんなもんいらねえよ! 馬鹿にするな!」

「今よりも多少、マシな格好ができるでしょう」

「……っ、いらねえ! それを置いたら、ぶつとばずぞ」

怒鳴りつけながらも、口にしたのが自分の台詞とは思えなかった。

もらえるものもろう。そうしなければ生きていけない。

だが、あいつを助けたのを、金のためだと思われるのは心底嫌だった。

「私にはこの金が貴方に必要に思える」

「……っ」

お前は、薄汚れたボロを身に纏ったみすぼらしい人間。

そう言われたような気がして——擦り切れた上着の裾をぎゅつと掴む。

「あ、あんたは……あいつに言われて、俺を探しにきたんじゃないのか!? 違うのか!?」

俺があいつを思い浮かべるように、あいつも俺を……

少しの沈黙のあと、豹男は首を横に振った。

「あの御方は忙しく、些細なことに構っている暇はございませんので」

「些細……俺を、わ、すれたって……こと?」

「ええ」

その言葉は、俺の心の奥深くに突き刺さった。視界がふつと暗くなるような感覚に陥る。^{おちい}

俺が呆然と立ち尽くしている間に、豹男はいなくなっていた。

身分が違う。スラム育ちの俺と、臣下を持つ高貴な獣人。初めから重ならない線。

けれど……会いたかった。

そのうち戻ってくるんじゃないかって。そう期待していたのは、俺だけだったんだ。

「——うっ!」

急に食べ物がり上がってきて、俺はその場に蹲って吐いた。

ほとんど中身のない黄色い液体が、止まらない。頭もガンガンと岩をぶつけられたように痛み出す。